塩なめ地蔵

今から８００年程昔。その頃の金沢の海に面した釜利谷、洲崎、町屋、六浦、野島など、ほとんどの村では塩づくりが盛んでした。村人達は朝比奈の切り通しを越え、鎌倉まで塩を売りに行きました。

昔は車などなかったので、塩を籠に入れ、天秤棒で肩に担いで歩いて朝比奈の峠を越えました。重い荷物を担いで、六浦から峠を越えて行くのはずいぶん大変だった事でしょう。峠の上のお地蔵様のところまで来ると、塩はズーンと重くなり天秤棒が肩に食い込み、体中汗びっしょりでへーとへと。だから村人達はいつもお地蔵様の前で一休みしました。すると疲れも取れ、村人達はいつもありがたく思い、「今日もたくさん売れますように」と、お地蔵様に大事な塩をひとつまみ供えてお願いしました。その頃政治の中心であった鎌倉は大変にぎやかで人も多かったので、金沢の美味しい塩はよく売れました。帰り道は荷物も心も軽くなり、朝比奈峠のお地蔵様の前でまた一休みしました。「今日もありがとう」とお礼を言って、「さぁ帰りましょう」とふと見るとたしか朝行くときにお供えした塩がそこにありません。辺りを見回しましたがどこにも無く、お地蔵様はただ微笑んでいるようでした。

塩のなくなった事が本当に不思議で、帰ってから他の村人たちに聞くと、みんなも同じ経験をしていました。それから、そのお地蔵様は「塩なめ地蔵」と呼ばれるようになりました。

今、そのお地蔵様は、鎌倉の十二所（じゅうにそ）にある光触寺（こうそくじ）というお寺の境内に残っています。

文　氏家　總子（ふさこ）

絵　吉広　恵理子